富士に祈る 69

國學院大學兼任講師　城﨑　陽子

解脱金剛記念館（旧・感謝会館：埼玉県北本市）

信仰と伝承 ―岡野聖憲・その23―

先回は、聖憲が昭和十七年（一九四二）五月に、教義のエッセンスともいえる『真行』を刊行した後に大病を患ったこと。そして、そこから奇跡的に復調し、御霊地に米内海軍大将を迎えたところまでを記した。今回は、戦局がいよいよ厳しくなり、空襲によって各地が焼け野原になった日本が、終戦の日を迎えるまでを記す。

昭和十九年（一九四四）が明けた。一月十五日、大陸では独立を目指すインド軍と提携した「インパール作戦」が実施され、インドに独立の機運が高まった。二月十四日には中国大陸における日本本土爆撃拠点を覆滅する、「大陸打通作戦」が下命された。一方、一月十一日には米軍機による台湾空襲が行われ、続く三十日には米国機動部隊によってマーシャル諸島が攻撃された。さらに、二月二十九日に米軍がアドミラルティー諸島のロスネグロス島に上陸したことによって、ラバウルにいた日本軍が孤立状態となった。本土への空襲が懸念される中、東京と名古屋で初めて「建物強制疎開命令」が出されたのもこの頃である。戦局が厳しくなり、生活用品が統制下におかれて不自由な生活を強いられることになってはいたが、未だ空襲が現実のものではなかった人々にとって、住み慣れた自宅が取り壊されていくのを目の当たりにすることほどショッキングな出来事はなかった。

二月十一日に行われた「大日本精神碑建立記念祭」で聖憲は「無我心の体現である犠牲的精神、服従の精神」を説いている。これは、「個々人が国策に従いつつ日々反省し、更生し、全力で精進を重ねること」（『新版解脱金剛伝』参照）を意味する。その具体的な現れが奉献金と慰問活動であった。特に、奉献金は航空機献金に顕著で、十月には陸・海軍に「報恩感謝号」と名付けられた戦闘機が一機ずつ献納された。また、三月には六回目を迎えた「靖国神社社頭対面遺児慰問」が行われた。そして、同じ三月には、旅行制限が実施される直前を期して、三聖地巡拝も行われたのである。

聖憲は戦時下において人々が、「精神的な支柱」を持つことの必要性を痛感した。聖憲が説いたのは「今を如何に生きるか」ということであった。神が与えてくれたものに不必要なものは絶対に存在しない、ならば、神が与えてくださった「今」が最善のものであるのだ。たとえ、戦況がどのように変化しようとも、生活がどのように苦しくなろうとも、この状況を心眼

によって見つめ、「今」じぶんがなすべきことを一つ一つ真剣に実行していくことが大切なのであり、この生き方の中においてこそ、必ずや真実の人生への道が開かれる体験を得ると説く。それは戦争という大きな困難に直面する「今」、最も単純にして明快な教えであったかもしれない。

刻々と戦況は悪化していた。三月三日には「決戦非常措置要綱」に基づいて、国民学校の給食、空地の徹底利用、疎開促進の三要綱が閣議決定され、特に「疎開」は順次実施に移されていった。また、同月七日には「学徒動員実施要綱」が決定され、勤労動員の強化と高等女学校校舎の工場化が行われることになった。八月四日には「一億国民総武装」が閣議決定され、同月二十三日には「学徒勤労令」「女子挺身勤労令」が公布施行された。そして、十一月にはいよいよ米軍の本土空襲が始まったのである。空襲が定期化する様子に、会員らから懇願され、聖憲が北本宿に疎開したのはその年の十二月であった。

昭和二十年（一九四五）、東京は空襲で年が明けた。その三月、東京、大阪、神戸の各都市は未曽有の大空襲を受けることになる。十日に本所、深川、江東、江戸川一帯に壊滅的な被害を出した空襲に次ぎ、四月十三日に行われた空襲で東京道場が焼けてしまった。報告を受けた聖憲は「焼けたものは仕方がない」と言い、いささかの動揺も見せなかったという。しかも、二日後の四月十五日には予定通り三聖地巡拝を挙行した。さらに、五月にはここ数年の間延期になっていた大祭を挙行したのである。この大祭に関する記録は聖憲が講演した速記録が残されているだけである。敗戦の色濃くなっていく中で、大祭にあたって聖憲が人々に説いたことは、先にも記した、「今ここにある現実を如何に精一杯生きていくか」ということであった。聖憲は「精神的な支柱」を「今を生きる」ことに集中させたのであろう。

同年八月六日広島に原爆が投下された。続く九日には長崎にも原爆が投下され、十日にはポツダム宣言受諾の申し入れが行われた。そして、十五日正午には玉音放送が流れ、日本は終戦を迎えた。この放送を感謝会館で聞いた聖憲は放送が終わると一言、「これでよかったのだ」と言った。聖憲は玉音放送を国民が生き続け、焦土と化した祖国を再興していく道を天皇が選択されたと受け止め、自身もそれを決意したからである。そして、アジアの植民地が独立への道を歩み始めたことを踏まえ、「負けたけれど勝ったんだよ」という言葉に込めて「聖戦」と主張してきたこの戦いの意義を会員に説明したのであった。

俳句で語る心は多

34

句・菅谷秀文

絵・橋本豊治

え　円満な心やすらかなる心

仏教とはどんな宗教でしょう、この問いの答えとなるのが、「七仏通誡偈」の偈文である。この偈文の中に、「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」という言葉がある。換言すると、「悪をなさない、善を行う、自己の心を浄める、これが仏教である」という意味である。

人間の心は移ろいやすく、汚れやすいもの。強い心を持って善を行い、悪を退けるならば、身も心も浄くなると信じ生活することで、此の心はやがて、その人全体の清浄につながり、生きた仏教であると言える。

心こそ心迷わす心なり、善い心、悪い心、全ての心は一つの心から生まれる。